

「太郎が恋をする頃までには…」を読んで

TV局の女性敏腕プロデューサーが私小説（フィクションな恋愛小説）「太郎が恋をする頃までには…」を出版し、結婚相手の猿回し師（TVCM「反省猿」で有名）が被差別部落出身と公表したことでマスコミで話題になったことをご存じの方は多いと思う。

小説とはいえ、差別の実態確認のために、著者は原稿10枚書いては夫に見てもらったとか。

小説の中で、男は「こういう境遇に生まれた人間は、立ち止まったら終わりだということを感じている。……。ほんの少しでもいいから、一歩前に踏み出すことをしなければならない。動き出さなければのたれ死んでしまうだけだ。我々のような人間は動かなければ生き残れないのだ。」と語り、女はその言葉に「私というひとりの人間を、人を、ひとを、形成している根源は“激情”だと、彼が気づかせてくれたのだ。」と、二人は結婚する。

結婚し、夫は、「日本という国が、本当の意味で先進国になるためには、このダブーを消滅せなければならない。心が豊かにならなきゃ真の先進国とは言えない。」「キョンちゃん（注：私小説の中の主人公の愛称）に代わりに伝えてもらいたい。ジャーナリストであるキョンちゃんに書いてもらいたいんだ、俺の全てを。本当の俺の人生を、世間の人に伝えて欲しい。」「世の中にはおれよりももっと傷ついている人たちが大勢いる。自分がカミングアウトすることで、そうした人たちの孤独感を少しでも減らせるかもしれない。」と妻に語る。

差別から受けた心の痛みを書の中で知ると、どうしても障害者の差別問題と重ねて読んでしまい、特に差別を受けた人がどうした心の痛みを抱きつつ日々過ごしているか、やはりまずは当事者からの発信が如何に大事か、それらの理解の一助となる書であった。

また、豊かな国とは、どういう国なのかとつい考え込んでしまう。

例えば、ある知人から、「北欧視察に行った折、ガイドに『公共の乗り物に障害者等用の優先席はあるのか』と尋ねたところ、『障害者等に席を譲るのは人として自然な行為なので、優先席の必要はない。』と云われ、恥をかいた。」と聞いたことがある。

社会の一人一人が自らの心の中にある差別意識を検証せず、優先席を設けるようなことで障害者等への理解・支援が進んでいると錯覚するような社会から、差別がなくなるのはまだまだ程遠い気がしてならない。